

令和 3 年 5 月 25 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00989

研究課題名（和文）先秦時代血縁集団の研究 清華簡歴史説話諸篇を用いた楚地域からの定点観測

研究課題名（英文）A Study of Kinship Groups in the Pre-Qin Period: The Fixed Point Observation from the Chu Area Using Historical Manuscripts of the Qinghua Bamboo-slips

研究代表者

小寺 敦 (KOTERA, ATSUSHI)

東京大学・東洋文化研究所・教授

研究者番号：30431828

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究においては、基礎作業として、清華簡報告書第7冊に収録された出土文献の訳注を作成し、そこに見える先秦時代における血縁集団と関係する事項のテキスト型データベースを作成した。その上で、これら基礎作業をもとに個々の出土文献から検討すべき問題点を抽出した。先秦時代の血縁集団に関する個別の論点を議論し、当時の人々の歴史認識に至るまで検討を行った。これらの研究成果は国際学会や学会誌などで発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究により、中国先秦時代の楚地域と中原地域における血縁集団に関する認識については、しばしば思われているような中原から周辺への一方通行ではなく、文献の伝播を通して、相互に影響を及ぼし合いながら共通した認識が生まれたことが明確になってきた。このことは地域間の諸要素が複合的に組み合わさって後の漢字文化圏の原型が成立した可能性を意味し、それに属する社会を考察する枠組みにも影響を及ぼす重要性がある。

研究成果の概要（英文）：In this study, I firstly drew up translations and annotations of the excavated manuscripts of the Qinghua Bamboo Slips Vol. 7 as the groundwork, and made a text database of the matters about lineage groups in the Pre-Qin period. Besides, based on this work, I extracted problems from each manuscripts. I examined each issue about lineage in the Pre-Qin period, and extended the object of this research to the perception of the history in this age. I read papers on these results at the international conferences and in the bulletins.

研究分野：中国古代史

キーワード：清華簡 先秦時代 血縁 歴史認識 漢字文化圏

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

### 1. 研究開始当初の背景

「家族」を含む血縁集団は大概の場合、政治・社会・思想など、人類諸集団における多くの要素の基盤となっている。中国先秦時代における血縁集団もその例外ではない。その形態は、特に東アジア諸地域においてプラス・マイナス両面において多大な影響を与えてきたし、中国先秦秦漢時代の成立が想定される文献においてしばしば理想化され、後世の模範となったり打倒されるべき対象となったりした。だがその実態は不明なところが多く、前近代より多くの学者が議論するところであった。近代に入ると、前近代の研究手法に加えて、欧米式の学問的方法論も導入され、社会経済史的な視点等が加えられて研究が進められた。他方、近代以降、特に近年は考古発掘の成果も増大し、先秦時代の血縁集団の実態に関する理解が進みつつある。先秦時代の最後の部分、つまり春秋戦国時代は社会変化の大きな時期であり、血縁集団においてもそれは同様である。春秋戦国以前の血縁集団のあり方がそれ以降と比較してどのように変化したか、何故それ以前のあり方がそれ以降のあり方に影響を与え続けたか、これは非常に大きな問題であり続けている。この問題についてはこれまで『春秋左氏伝(左伝)』『史記』等の伝世文献により、春秋時代以前の氏族制社会が、戦国時代以降の単家族を基礎とする社会へ変化していくとする、大まかな枠組みに関するある程度の共通理解が得られ、伝世文献のみによる研究はそこまででほぼ限界に達していた。しかし特に1990年代以降、戦国時代の楚国であった中国大陸の湖北省・湖南省を中心とする地域において、新出土資料の発見が増加の一途をたどり、伝世文献によるそうした旧来の理解に修正を迫る局面が増えつつある。この種の最新の出土文献に清華簡の諸篇がある。これは正式な発掘を経ず、盗掘によって発見されたと考えられる出土資料であり、それ故に厳密な真偽鑑定が必要となる類のものである。だが、それが戦国時代の楚地域におけるどこかの墓地の副葬品であることについては、研究者の間でほぼ共通した理解が得られている。清華簡に含まれる文献のジャンルは、思想書・歴史書・詩文等、様々なものが含まれており、伝世文献に見られない情報を有するものが多い。

### 2. 研究の目的

現代中国の河南省を中心としたいわゆる中原地域は、中国古代における政治・文化の中心であり続けた。伝世文献は編纂・伝承される過程で、中原地域とそこを基盤とする王朝の影響を陰に陽に被っており、中原地域ないし地域的要素を捨象した汎地域的概念を反映する傾向にある。それ故、中国古代全体を大まかに把握する場合には有用であるが、一地域の歴史を細かく知るには限界のあることが多い。従来の伝世文献を主体とする研究では、中原とそこに基盤を置く王朝の歴史観の影響を完全に除去することは、資料上の制約からかなり困難であった。他方、出土文献は考古発掘によって得られるものであるが故に、今日まで伝存しなかった資料が少なからず含まれ、伝世文献には含まれない情報を保持していることがしばしばある。出土文献には有機物である竹・木・絹等に筆写された簡帛、および無機物である甲骨・青銅器等に彫り込まれたり鑄込まれたりした甲骨文・金文がある。有機物の保存上の問題から、先秦時代の簡帛には今日の中国の湖北省・湖南省を中心とする楚地域から出土したものが多い。本研究では、検討対象を清華簡の諸篇、特に伝世文献に存在しない歴史説話に絞ることにより、いわば先秦時代におけるミクロな視点からの定点観測を行うこととしたい。歴史説話は登場人物の人間関係や家族に関する倫理・思想など、血縁集団に関連する要素をしばしば含む。本研究でとりあげる清華簡諸篇は今日まで伝存しなかったものであるが、その内容には伝世文献と共通する要素も一部含まれている。清華簡は楚地域の特定墓地の出土品と想定されるが故に、出土地を始めとする特定地域の観念を反映する傾向があるものと想定され、限られた地理的範囲における詳細な歴史を知るにはまことに有効な資料である。本研究ではそうした清華簡の諸篇を中心資料としつつ、伝世文献との比較対照を行いながら分析を加えることによって、中原中心的な視点から脱しつつ、先秦時代における血縁集団のあり方を、汎地域的な要素と地域性の強い要素の両面から立体的に把握することができるようになって考えている。今日では中国ないし中原中心史観や『史記』『漢書』といった公定ないしそれに近い史書に見られるような単線的な王朝史観が批判されることが増えつつあるが、本研究によって、単純な特定地域中心の歴史観や正統王朝中心のそれに陥ることを避け、政治権力としては秦漢帝国によって滅ぼされてしまった戦国時代の楚国に相当する地域の視点から歴史を再検証することができる。本研究を進めることにより、楚地域の形成と展開に関する歴史に血縁集団の側面から光が当てられるとともに、従来の単線的で中原中心的な中国古代の血縁集団に関する認識は見直しを迫られることになるであろう。また先秦時代の楚地域と日本・朝鮮半島との間には稲作の伝播を始めとして、重要な交流のあったことが議論されており、本研究は東アジア地域における血縁集団を解明する手掛かりともなる。

### 3. 研究の方法

本研究は3年の期間内に楚地域に視点を置いた先秦時代血縁集団研究を進めていくことを目的とする。これはいわば先秦時代におけるミクロな視点からの定点観測である。そこで射程に入るのは、従来の伝世文献から由来する、中原とその周辺を根拠地とする正統王朝寄りの視野に偏

った血縁集団研究の見直しである。3年間という限られた本研究期間内においては、平成29年度までの筆者の到達点を起点として、最近出版された清華簡の報告書第7冊『清華大学蔵戦国竹簡』(柒)(中西書局、2017年)に収載される文献を基本資料として検討することとしたい。それは歴史物語風の「史書」と目される同時代資料である。『子犯子余』『晋文公入於晋』『越簡子』は晋の歴史、『越公其事』は越のそれに関する説話が書かれている。晋は春秋時代の中原、越は春秋末期から戦国中期の江南において楚と競合した大国である。上記出土文献を検討することにより、楚がこれら周辺諸国の血縁集団関連諸要素をどのようなまなざしで見ているのかが明らかになる。またそのことは楚自身の鏡像でもあろうから、楚の血縁集団の実態を解明する手掛かりともなる。筆者は既に、楚地域をミクロに探求することが従来の伝世文献に専ら頼る研究とは異なる視界を開くという本研究の序章として、清華簡報告書第6冊の『鄭武夫人規孺子』に関する譯注・論文を準備している。その篇は楚の重要な隣国の一つである鄭を舞台としており、鄭やその国の人物、特に女性の描き方が伝世文献とはかなり異なることを明らかにした。従来、父系的・男性的原理は主に文化的先進地域の中原、それ以外の原理は中原以外の文化的後進地域に由来すると漠然と考えられてきたが、中原を起源として後世の中国を始めとする東アジア世界に受け継がれていったと考えられてきた要素は、必ずしもそうではないことが見えてきつつある。以上を踏まえた上で、研究期間内に明らかにしようとすることは次の通りであり、3段階に分けられる。( )各年度において清華簡『子犯子余』『晋文公入於晋』『越公其事』の釈文を作成し、それら資料の概要を把握して本研究を進める基礎とする。( )各年度においてその釋文を作成する毎に、他の先秦出土文献・伝世文献とも対照させつつ、血縁集団に関連する要素に着目して抽出した個々のデータをテキスト型データベースとして整理する。( )清華簡は戦国時代の楚地域で副葬されたことが想定されており、その諸篇は必ずしも楚地域の成立とは限らないものの、楚地域で受容されたことから、楚地域と親和性の強い観念が含まれている可能性が高く、その文章は伝世文献に見えない内容が多い。他方、伝世文献は楚地域で成立したとは限らず、しかも編纂・伝承過程で地域性を薄められることが少なくなかったと考えられる。そこで上記データベースを利用して、血縁集団の側面から、これら楚地域由来と目される出土文献と、汎地域的な要素を強く持つと考えられる伝世文献との資料的性格の異同を明らかにする。そうすることによって、先秦時代の楚地域における血縁集団の特質や汎地域的なその共通点を見出すことができる。その結果、先秦時代における血縁集団をめぐる政治的・社会的・思想的な状況が明らかになる。本研究において明らかになることは、中国古代帝国の特質を楚地域から見直す契機としての意味ももつ。

#### 4. 研究成果

1年目は『子犯子余』『晋文公入於晋』の釈文を作成を進めることとし、その公表については翌年以降の機会を待つこととした。またその内容を他の先秦出土文献や先秦時代の成書の可能性がある部分を含む主要な伝世文献と比較検討するため、これら文献に関連するテキスト型データベースを作成した。本年度11月には京都の日本秦漢史学会2018年度大会で報告した「楚からみた晋-清華簡『子犯子余』を起点として-」はこうした成果に直接基づき、清華簡『子犯子余』を中心資料として、これに『晋文公入於晋』などの清華簡諸篇や伝世文献とも比較検討し、それら諸資料における晋文公とその側近との描かれ方の異同から、戦国時代の楚において、楚とは異なる血縁集団で楚が敗北した敵だったはずの晋文公たちは現前の三晋諸国やそれに近い時代の晋国と切り離されて認識されていたことを論じた。本年度末には、『子犯子余』などと同じく歴史説話であることにより本研究に関連する清華簡の一篇に関する釈文「清華簡『鄭武夫人規孺子』訳注」(『東洋文化』99)を公開した。またそれに関連して9月に中国の武漢大学における国際学会「楚文化与長江中游早期開發國際學術研討会」に参加し、「關於清華簡《鄭武夫人規孺子》中所描繪謙遜的君主形象」を發表し、清華簡『鄭武夫人規孺子』で強調され、伝世文献には記録されない鄭武公・莊公の君主としての謙る姿勢が、春秋時代以前の血縁に基づく社会では君主として通常の行為であったものが戦国時代に入って王権を支える道具の一つとなったことを示すことを述べた。

2年目は既にほぼ完成していた『子犯子余』『晋文公入於晋』の釈文について、9月の研究会報告における討論、加えて当該文献に関する研究の進展を反映するため、加筆修正を行った上で発表し、以下の個別研究の基礎とした。本年度も研究対象文献に関するテキスト型データベースの作成を続けた。また、11月には第1年目の学会報告を修正した論考「楚からみた晋-清華簡『子犯子余』を起点として-」が学会誌に掲載された(『日本秦漢史研究』20)。そこでは戦国時代の楚における晋文公評価が北方と共有されたことなどを述べた。9月には中国北京での国際学会「商周国家与社会國際學術研討会」において「關於清華簡《晋文公入於晋》中理想的君主像」を報告した。清華簡『晋文公入於晋』は、晋文公即位直後の政策と覇業を描き、時間的には『子犯子余』の続きである。この報告では、本篇における晋文公の描かれ方を分析し、清華簡の他篇や『左伝』『国語』などの伝世文献と比較検討し、晋文公が血縁原理に繋がる、清華簡や伝世文献の記す徳目(主に謙讓)を備えた理想的君主とされていること、その徳目が成就してはじめて生産・祭祀・軍事上の成功が得られることを論じた。12月、岩手大学での国際学会「東北アジア青銅文化比較研究國際學術シンポジウム」において「清華簡『繫年』を中心としてみた楚地域の歴史観」を發表した。清華簡の読者においては、伝世文献とは異なる形で、晋・秦・越・鄭との関係性を軸にして展開する楚国の歴史的イメージが形成されたことなどを論じた。

最終年度である3年目は新型コロナウイルス感染症の流行と重なり、国内外での学会・研究会活動の停止など、研究の進行に対する障害は想定外に多かったが、可能な限り計画を予定通り遂行するよう努力した。まずは清華簡第7冊所収の出土文献の釈文作成を仕上げ、本年度の研究の基礎とした。その成果として清華簡『越公其事』の訳注を所属機関の紀要に発表した。これに加えて研究対象文献に関するテキスト型データベースの作成を継続した。更に9月には台湾で開催された国際学会「第二屆《群書治要》國際學術研討會」にオンラインで参加した上で「關於清華簡《趙簡子》中的晋国君主」を発表した。そこでは清華簡『趙簡子』の春秋時代晋国三君主の評価について他の出土文献・伝世文献と比較しつつ、その記事が比較的中立的立場から書かれており、中原を含む北方と楚との間に共通する歴史認識が存在したことを論じた。この報告は論文集の一部として台湾で出版される予定である。本研究の3年間において明らかにしたことで特に意義があると考えられるのは、楚地域と中原地域における血縁集団に関する認識には、想定された以上に共通項が多いということである。楚と中原における文献の伝播を通して、しばしば思われているような中原から楚への一方通行ではなく、相互に影響を及ぼし合いながら共通した認識が生まれ、現実社会にもフィードバックがなされたあり様が浮かび上がってきた。このことは地域間の諸要素が複合的に組み合わせられて後の漢字文化圏の原型が成立した可能性を意味し、それに属する社会を考察する枠組みにも影響を及ぼす重要性がある。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 小寺敦	4. 巻 20
2. 論文標題 楚からみた晋 - 清華簡『子犯子余』を起点として -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本秦漢史研究	6. 最初と最後の頁 1-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小寺敦	4. 巻 177
2. 論文標題 清華簡『子犯子余』訳注	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京大学東洋文化研究所紀要	6. 最初と最後の頁 232-306
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小寺敦	4. 巻 177
2. 論文標題 清華簡『晋文公入於晋』訳注	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京大学東洋文化研究所紀要	6. 最初と最後の頁 308-340
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小寺敦	4. 巻 99
2. 論文標題 清華簡『鄭武夫人規孺子』訳注	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東洋文化	6. 最初と最後の頁 123-199
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 小寺敦
2. 発表標題 關於清華簡《晉文公入於晉》中理想的君主像
3. 学会等名 商周国家与社会國際學術研討会（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小寺敦
2. 発表標題 清華簡『繫年』を中心としてみた楚地域の歴史観
3. 学会等名 東北アジア青銅文化比較研究國際學術シンポジウム（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小寺敦
2. 発表標題 關於清華簡《鄭武夫人規孺子》中所描繪謙遜的君主形象
3. 学会等名 楚文化与長江中游早期開發國際學術研討会（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小寺敦
2. 発表標題 楚からみた晋--清華簡『子犯子余』を起点として
3. 学会等名 日本秦漢史学会2018年度大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------